

憲法改定の本質とわたしたちの課題

金子勝さん（立正大学名誉教授） 2.11県民集会記念講演（要旨）

金子勝さん



岸田首相を「改憲」と「大軍拡」に駆り立てている根源は、「21世紀の日米安全保障条約体制」にある。米国のバイデン政権は「今後6年間に中国が台湾に侵攻する」と仮説を立て、それに基づいた「米中戦争」の準備に入った。2021年3月アメリカ・オーストラリア・インド・日本の4カ国で「自由で開かれたインド太平洋」を形成するという名目で「4カ国協力機構QUAD（クアッド）」の中国包囲網を構築した。同年9月には、アメリカ・イギリス・オーストラリアの3カ国で、新たな軍事同盟機構となる「AUKUS（オーカス）」という2つ目の中国包囲網を形成した。

バイデン大統領は日本政府に、「台湾海峡の平和と安定のために防衛力を強化し有事の際に参戦すること」「沖縄名護市の米軍基地建設を普天間飛行場の継続的使用を回避する唯一の解決策とする」とを約束させた。

「21世紀の安全保障条約体制」のもとで、日本は「米中戦争」に参加するための準備を始めなくてはならない。そのために、①軍拡予算（軍備増強・軍備拡大）が必要である、②改憲をして、自衛隊を憲法で規定し、緊急事態対応を明記しなければならぬ。だから、今、日本は戦争前夜の始まりにいるといえる。

今年の参議院選挙は、改憲を許すかどうかの天下分け目の政治決戦となる。参院選後の3年間は国政選挙のない「黄金の3年間」となる。改憲派は、参院選で3分の2以上の議席を確保して、この3年間のうちに、改憲も大軍拡も実現して、「米中戦争」に参加できる体制を作り上げようとしている。

それに対して、私たちは、①平和のもとで幸福になる権利がある

②武力による威嚇及び武力の行使が違法となる時代にする

③非武装・非戦・対話・永久平和主義を掲げている憲法9条を人類に導きの星にする

という大同団結した「改憲阻止のための統一戦線」で対抗しよう。

（文責 北村）

リモート参加しての感想

「まさか、ここまで」金子先生のお話を聴いて、改憲への危機感が益々強くなりました。ハト派のふりをして発足した岸田政権ですが、「改憲」と「大軍拡」に向け一直線に邁進しています。総裁任期中に9条の改憲、緊急事態条項の導入を含む四項目の改正を明言し、推進本部を改称した「憲法改正実現本部」を設置して全国各地で対話集会を担当する「タスク・フォース」（特殊任務集団）をスタートさせました。大軍拡のために、来年度の軍事費を補正予算と合わせて約6兆2千億円（GDPの1.1%）まで増額し、近い将来は1.1兆円（2%）にすると思われています。首相は相手国を先制攻撃してその後全滅させる「侵略権」の行使につながる「敵基地攻撃能力」の保有を声高に叫び、すでに9条を完全に無視してはばからない態度です。改憲発議させないためにも参院選はまさに「関ヶ原」です。改憲阻止に向け、私たちの草の根の力を結集し団結していく決意を新たにしました。

さいたま市教職員組合
植竹中学校分会 清水和宏



第2215号

編集兼発行人
埼玉県教職員組合
情報宣伝部
さいたま市浦和区高砂
3-12-24教育会館内
電話048 (824) 2511
(一部 10円)
週刊毎週水曜日発行

（組合員の購読料）
は組合費に含む

▽埼玉教組へメール



▽埼玉教組HP



特集

私たちの「3か年計画」



北埼玉支部 書記長
佐藤さん

40年前、たった一人でストライキに突入して、後で紙切れ一枚もらって処分されたことを忘れられません。行田単組は過半数分会、羽生・加須のほとんどが一人分会でした。私を支えたのは、社会正義と熱いヒューマニズムと数少ない単組の仲間でした。

今の北埼玉支部とこれからの北埼玉支部を支えているものが何なのかを考え、議論し、それを若い教師に伝え続けることこそ、3か年計画の根幹だろうと。

第一に、「なぜ、一

人でも分会でたたかうのか」の根拠を職場ハンドブックQ&A学習して学ぶ。できれば、学期1回は、取り組む。

第二に、「勇気」出して、「学習会に行かない？」と声をかける。憲法力フェを続ける。未組合員が普通に集まれる状況を作り出す。毎回、5人の未組合員と共に。

第三に、すべての分会に組合掲示板を持つこと。

第四に、行政との交渉権を維持すること。



大里・児玉支部 書記長
水原さん

スムーズな世代交代、培ってきたものの受け継ぎ、これは、教育の現場でも同様である。私たちが目指していることは、組織の強化である。そのために一つにまとまれる力（ベクトル）が必要となる。大里教育会館という場を考え、この思いを一層強めている。役員会議しかり、学習会しかり、教員採用試験講座しかり、組合員のつながりはもちろん、未組合員にも頼りの場となっている。今、大里・児玉支部では、支部を一つのまとまりとして再認識しようとしている。単組代表の役員でなく、支部全体の役員としての考え方だ。支部への結集という方向性・

ベクトルを大切にしたい。

もう一つの向きは、支部から組合員へ、であり、支部からの連絡の際は必ず近況を聞くようにしている。本採用、臨時的任用、短時間勤務、再任用、任用形態も様々となる。話の切り出しには事欠かないと考える。それだけでなくは気持ちが続かない。また、話をきっかけに「LINEオープンチャット」「つながるウィーク」のパンフを送ってみた。共済に入った方に対しては、「給付申請は済ませた？」の問いかけも抵抗なくできるものである。組合員へのつながり、未組合員へのよびかけを大事に、支部発信を続ける考えです。

学校では年度当初の未配置や年度途中の未補充問題が深刻化し、何とか補い合って運営している。また、新型コロナウイルス感染症防止の徹底や濃厚接触者特定のための聞き取りなど、感染症の専門家ではない教職員に押し付けられる業務も増加している。結果、多忙を極めるが故に若手教職員の退職が増加する問題も発生している。こうした状況にある校長は「先生方は公務員としての自覚を」とか「公務員だから責任を持って…」などあたり前のように言うが、▼「学校における働き方改革」が標榜された2年半、段階的な350人学級実施やスクールサポートスタッフの配置、部活動の外部委託などを成果としているが圧倒的に効果は薄い。持ち時数減による授業準備時間の確保、感染症対策にもなる20人学級、安心して休める学校運営、これこそ国民が求めることであり抜本的定数改善こそ実現すべきだ。「私は聞く耳を持っている」という者がいるが、彼のは飾りなのだろうか。(い)

